

【研究ノート】

日本人 L2 中・上級学習者と母語話者の英語抽象名詞の可算化に関する 使用実態の定性、特定性、総称性からの分析

愛知産業大学短期大学 西田一弘

要 旨

日本人中・上級英語学習者 (NNS) と英語母語話者 (NS) では、抽象名詞の冠詞の共起や単数形・複数形の使い方は異なることなく、ほぼ同じであった。そこで、誤用の要因は使い方ではなく、他にあると考えられる。また、「特定性 (s) と総称性 (g) が反対の概念である」と考えることから生じると思われる誤用の存在は、定性 (d) を加えた、特定性 ($\pm s$) と総称性 ($\pm g$) が対立しない場合 (プラスとプラス、マイナスとマイナス) に焦点を当てた場合 ($+d +s +g$, $-d +s +g$, $+d -s -g$, $-d -s -g$)、NNS の正用・誤用と NS の使用例では、 $+d +s +g$ 以外のすべての使用例が存在し、その使用実態が異なるので、総称性を抽象名詞と冠詞の共起に関する重要な意味素性とするのは、妥当だと考えられる。NNS の正用例と NS の使用例における意味素性は、 $+d -s -g$ を除いてほぼ同じであり、冠詞と単数形・複数形の共起に関する使用実態に問題がないことがうかがえるが、日本人の誤用の使用例においては、1 番目の $-d +s -g$ と 2 番目の $+d +s -g$ が英語母語話者のものとは逆であり、3 番目に使用が多い $-d -s +g$ (8.97%) の使用が少なく、意味素性の認識の違いが誤用を起こす原因となっている可能性がある。

1. 研究の背景・目的

(1) 冠詞の決定要因：定性と特定性

冠詞の適切な選択には、英語特有のものの方の見方、認識のあり方が不可欠である。英語冠詞の基本体系の理解には、①名詞の意味対象に個としての形や姿が認められるか、②特定対象の指示同定に必要な情報知識が話し手と聞き手の間で共有されているか、この 2 点に関する判断が必要となる (関口 2016)。しかるに抽象名詞には①は考慮しにくいので、②が焦点となる。①に関しても具象性が高まっていると判断される場合は、可算化が起きていると考えられるが、その要因は、②と相まって個別の抽象名詞で再検討が必要である。

定性 (definiteness) は聞き手の立場からの分類である。即ち、聞き手が知っている (と話し手が認める) 名詞句が 定名詞句 (definite NP) となる (Chafe 1976; 金水 1986)。特定性 (specificity) とは、問題となっている名詞が具体的に指している対象を話し手が頭に思い浮かべているかどうかを表す概念である (Ionin et al. 2004; 石田 2002)。石田 (2002) は定性から、織田 (2002) は特定性から、名詞につける冠詞の条件を説明しようとしている。Ionian et al. (2004) は定性と特定性が冠詞選択を支配するパラメータの 2 つの主要な意味素性であり、L2 学習者が正しいパラメータをセットし冠詞を使用することができない流動性を生み出しているとしている。定性により冠詞が決まり、その後特定性から冠詞の選択が起こる。つまり、定性 (d) が特定性 (s) より影響力が強い。当然、 $+d -s$ 、

-d +s の場合、定性か特定性かどちらにより大きな影響を受けるのかが問題となるが、定性により大きな影響を受けていると考えられる。母語話者の第二言語獲得における冠詞の個別性と普遍性について、Hawkins et al. (2005) は、母語話者は定性を基に、日本人 L2 学習者は特定性を基に冠詞を選択するとしている (西田 2020)。

総称性 (genericity) とは「共通の特質を持っている組ないしは類を全体として表象しているかどうかを示すもので、統語上の概念というよりも意味論上の概念である」(石田 1994)。本研究では、これらの意味素性の内、最も一般的である、定性、特定性に総称性を加えて、日本語を母語 (L1) とする L2 英語学習者への冠詞選択に与える影響を検証する。なお、過去の研究では名詞(具象名詞と抽象名詞など)を分類することはないが、日本人が苦手である抽象名詞と冠詞の共起に絞って議論を進める。

(2) 特定性と総称性の共起

特定の反対は総称性と思われがちだが、実際は「特定物+非特定物=総称」であることとわかるように、特定の反対は総称ではなく、非特定であり、特定は総称の一部である。特定の反対は全体だとする認識が誤用を生む可能性が高いと筆者は考えるので、調査項目の意味素性の 1 つに総称性を加えた。

2. リサーチ・クエスチョン

- (1) 抽象名詞に関して、日本人の誤用、日本人の正用、英語母語話者の使用では、どのような特徴があり、その理由は何なのか。
- (2) 抽象名詞と冠詞の共起を考える上で、抽象名詞の意味素性として総称性を選ぶことは妥当だと言えるのか。

3. 仮説

- (1) 日本人中・上級英語学習者と英語母語話者では、抽象名詞の冠詞の共起や単数形・複数形の使い方などが異なる。それが、誤用としても表れてくる。
- (2) 日本人中・上級英語学習者の中には、総称の反対が特定であるという認識があり、誤用を生む一因ともなっている。そこで、抽象名詞と冠詞の共起を考える上で、抽象名詞の意味素性として総称性を選ぶことは妥当だと言える。

4. 調査結果

(1) 抽象名詞の正用・誤用と冠詞、単数形・複数形の共起との関連

西田 (2020) ¹ において、抽象名詞の可算化に関する、定性 (d)、特定性 (s)、総称性 (g) の意味素性における誤用分析の結果は以下のようになっている。表 1 は調査の結果、10 個以上の誤用があったもので、それぞれの単語について正用と誤用を冠詞の共起と単数・複数形についてまとめたものである。誤用に関しては正用に修正されたものの数 (トークン) を表示した。なお、西田 (2020) の同じ表では、分類の数値に誤りがあったため今回修正し、再度統計処理を行ったが、ほぼ同じ結果であった。

表 1. 抽象名詞の正用／誤用 の分類（トークン） —冠詞と抽象名詞—

抽象名詞	単数形			複数形		合計
	—	a(n)—	the—	the—s	—s	
activity	12/0	2/8	4/1	19/5	0/1	37/15
Chance	13/2	13/6	4/2	8/5	1/1	39/16
education	321/7	1/24	11/2	1/0	0/0	334/33
effect	5/0	2/8	7/1	18/2	3/3	35/14
examination	15/0	6/3	30/18	24/4	4/0	79/25
experience	21/2	3/6	8/0	19/2	1/0	52/10
game	8/0	21/19	51/1	81/9	9/4	170/33
government	4/0	0/0	18/15	2/0	2/0	26/15
job	32/0	28/21	9/2	25/6	0/0	94/29
language	20/0	16/9	15/4	19/3	1/0	71/16
life	159/1	17/15	5/1	65/17	1/0	247/34
opportunity	2/1	2/4	2/1	20/5	0/0	26/11
problem	30/0	9/10	9/8	52/15	11/0	111/33
reason	17/1	8/6	45/9	82/19	18/0	170/35
skill	45/6	0/2	6/1	55/5	0/0	106/14
subject	1/0	6/0	2/1	37/13	3/0	49/13
system	34/0	6/7	26/18	6/5	3/0	75/30
time	199/6	28/20	27/6	20/5	0/0	274/37
way	34/0	12/11	44/4	16/6	2/0	108/21
合計	972/26	180/179	323/95	569/126	59/9	2103/435

表 2 は表 1 の合計数のみ再掲載したものである。英語 L2 中上級者の抽象名詞の正用、誤用の—、a(n)—、the—、—s、the—s ごとの頻度について、クロス集計を行った。カイ 2 乗検定を行ったところ、 $\chi^2(4) = 429.5, p < 2.2e-16$ となり、偏りは有意であった。また、クラメールの連関係数を算出したところ、 $V = 0.411$ となり、小さな効果であった。残差分析を行ったところ、表 3 の残差の一覧の通り、3 つの項目において正用と誤用に有意差があった。なお、フィッシャーの正確確率検定においても $p < 2.2e-16$ となり、偏りは有意であったが、複数形の 2 つ（—s、the—s）では有意差がなく、誤用が極めて多いという結果となった。なお、今回の結果は修正前の前回のものとほぼ同様であった。

表 2. カイ 2 乗検定：抽象名詞の正用／誤用 の分類（トークン） —冠詞と抽象名詞—
（ ）内は期待値

抽象名詞	単数形			複数形	
	—	a(n)—	the—	the—s	—s
正用	972 (826.9)	<u>180 (297.5)</u>	<u>323 (346.4)</u>	569(575.9)	59(56.3)
誤用	26 (171.1)	<u>179 (61.5)</u>	<u>95(71.6)</u>	126(119.1)	9(11.7)
合計	998	<u>359</u>	<u>418</u>	695	68
<正用／合計>	<97.4%>	<u><50.1%></u>	<u><77.3%></u>	<81.9%>	<86.8%>

表 3. 残差分析 (カイ 2 乗検定: 抽象名詞の正用/誤用 の分類 (トークン)
—冠詞と抽象名詞—

抽象名詞	—	a(n) —	the —	—s	the —s
正用	p < 0.001	p < 0.001	p < 0.001	0.4163739	0.3864992
誤用	p < 0.001	p < 0.001	p < 0.001	0.4163739	0.3864992
有意差	有 (正)	有 (負)	有 (負)	無	無

表 2 において、①単数形 (—) においては、正用は期待値を上回り、誤用は期待値を下回っている。即ち、正用と誤用は有意差もあり、習得はできていることがわかる。②単数形 (a(n) —) においては、正用は期待値を下回り、誤用は期待値を上回っているため、正用と誤用の有意差は習得ができていない負の有意差であることがわかる。③単数形 (the —) においては、正用は期待値を下回り、誤用は期待値を上回っているため、正用と誤用の有意差は習得ができていない負の有意差であることがわかる。④複数形 (—s) においては、正用では若干期待値を下回り、誤用も若干期待値を上回っており、有意差もなく、習得はできていないとすることができる。⑤複数形 (the —s) においては、正用は若干期待値を上回り、誤用は若干期待値を下回るが、有意差はなく、習得はできていないとすることができる。

表 4. 残差分析 (カイ 2 乗検定) の結果: 抽象名詞の正用/誤用 の分類 (トークン)
—冠詞と抽象名詞—

抽象名詞と冠詞の共起と 単数形・複数形	単数形			複数形	
	—	a(n) —	the —	—s	the —s
習得状況	◎	xx	xx	x	x

無冠詞単数形 (—) の習得ができていないのは、本来の抽象名詞の無冠詞・単数形は習得が容易なことを表す結果である。抽象名詞・単数形の不定冠詞 a(n) や定冠詞 the との共起は、抽象名詞の個別化を意味するので、抽象名詞・複数形の無冠詞や定冠詞との共起以上に違和感を感じる場所であり、誤用が多いと思われる。というのは、複数形は本来の抽象名詞の単数形・無冠詞の形を除き、単数形より以上に漠然とした概念であると考えられるからである。

(2) 抽象名詞の正用・誤用と定性 (d)、特定性 (s)、総称性 (g) との関連

表 5 は調査の結果、10 個以上の誤用があったもので、それぞれの単語について正用と誤用を定性 (d)、特定性 (s)、総称性 (g) とについてまとめたものである。誤用に関しては正用に修正されたものの数 (トークン) を表示した (西田 2021)。なお、以前のデータ集計を見直したところ、若干の数値の間違ひを見つけ、今回修正した (西田 2020)。

表 5. 抽象名詞の正用 / 誤用 (トークン) 一定性、特定性、総称性一

意味素性	+d +s +g	+d +s -g	+d -s +g	+d -s -g	-d +s +g	-d +s -g	-d -s +g	-d -s -g	合計
activity		9/3			1/3	5/0	15/9	7/0	37/15
chance		2/5				31/10	0/1	6/0	39/16
education		149/2				30/27	155/4		334/33
effect		15/4				19/10		1/0	35/14
examination		44/19				20/5	15/1		79/25
experience		22/0		1/0		19/8	4/2	6/0	52/10
game		73/8			20/5	16/12	58/8	3/0	170/33
government		21/15				1/0	2/0	2/0	26/15
job		31/2			0/9	50/13	12/5	1/0	94/29
language		29/4			0/5	9/3	21/3	12/1	71/16
life		144/20				79/14	24/0		247/34
opportunity		6/3			0/1	12/6	1/1	7/0	26/11
problem		50/11				26/20	35/2		111/33
reason		91/18				69/17	4/0	6/0	170/35
skill		38/2			0/1	46/8	18/3	4/0	106/14
subject		13/5				4/9	25/0	7/0	49/14
system		63/21				11/9	1/0		75/30
time		95/10				98/27	81/0		274/37
way		68/5				31/16	6/0	3/0	108/21
合計	0/ 0	963/ 157	0/ 0	1/ 0	21/ 24	576/ 214	477/ 39	65/ 1	2103/ 435

表 6 は表 5 の合計数のみ再掲載したものである。英語 L2 中上級者の抽象名詞の正用、誤用の +d +s +g, +d +s -g, +d -s +g, +d -s -g, -d +s +g, -d +s -g, -d -s +g, -d -s -g (+d +s +g, +d -s +g, +d -s -g, -d -s -g は実例不足のため検証できず) ごとの頻度について、クロス集計を行った。カイ 2 乗検定を行ったところ、 $\chi^2(3) = 134.67, p < 2.2e-16$ となり、偏りは有意であった。また、クラメールの連関係数を算出したところ、 $V = 0.233$ となり、小さな効果であった。残差分析を行ったところ、表 7 の残差の一覧の通り、4 つの項目において正用と誤用に有意差があった(正の有意差を負の有意差が存在する)。なお、フィッシャーの正確確率検定においても $p < 2.2e-16$ となり、偏りは有意であった。

表 6. 抽象名詞の正用 / 誤用分析 (トークン) 一定性、特定性、総称性一
() 内は期待値

意味素性	+d +s +g	+d +s -g	+d -s +g	+d -s -g	-d +s +g	-d +s -g	-d -s +g	-d -s -g
正用	*0	963 (923.3)	*0	*1	21 (37.1)	576 (651.2)	477 (425.4)	65
誤用	*0	157 (196.7)	*0	*0	24 (7.9)	214 (138.8)	39 (90.6)	*1
合計 <正用/ 合計>	0 <->	1120 <86.0%>	0 <->	1 <100%>	45 <46.7%>	790 <72.9%>	516 <92.4%>	66 <98.5%>

表 7. 残差分析 (カイ 2 乗検定: 抽象名詞の正用/誤用の分類 (トークン)
— 一定性、特定性、総称性 —

意味素性	+d +s -g	-d +s +g	-d +s -g	-d -s +g
正用	<u>p < 0.001</u>	<u>p < 0.001</u>	<u>p < 0.001</u>	<u>p < 0.001</u>
誤用	<u>p < 0.001</u>	<u>p < 0.001</u>	<u>p < 0.001</u>	<u>p < 0.001</u>
有意差	有 (負)	有 (正)	有 (正)	有 (負)

表 5 において、①+d +s -g においては、正用は期待値を上回り、誤用は期待値を下回っている。即ち、正用と誤用は有意差もあり、習得はできていることがわかる。②-d +s +g においては、正用は期待値を下回り、誤用は期待値を上回っているため、正用と誤用の有意差は習得ができていない負の有意差であることがわかる。③-d +s -g においては、正用は期待値を下回り、誤用は期待値を上回っているため、正用と誤用の有意差は習得ができていない負の有意差であることがわかる。④-d -s +g においては、正用は期待値を上回り、誤用は期待値を下回っている。即ち、正用と誤用は有意差もあり、習得はできていることがわかる。

表 8. 残差分析 (カイ 2 乗検定) の結果: 抽象名詞の正用/誤用の分類 (トークン)
— 総称性、定性、特定性 —

意味素性	+d +s +g	+d +s -g	+d -s +g	+d -s -g	-d +s +g	-d +s -g	-d -s +g	-d -s -g
習得状況	—	◎	—	—	××	××	◎	—

(3) 抽象名詞の正用・誤用例と英語母語話者における使用例の、定性 (d)、特定性 (s)、総称性 (g) との関連の比較

英語母語話者と日本人 L2 学習者共に、Φ (単数名詞/複数名詞) の時は、抽象名詞はどのような意味素性の状態なのか、不定冠詞 a(n) が付く時には抽象名詞はどのような意味素性の状態なのか、定冠詞 the が付く時は抽象名詞はどのような意味素性の状態なのかを検証する。即ち、今回の 2 つの調査で使用した日本人 (NNS) に誤用の多かった 19 の抽象名詞と冠詞の共起を、英語母語話者 (NS) はどのように使用しているのか、日本人の使用との違いを比較する。これは英語母語話者と日本人との抽象名詞と冠詞の共起に関する使用実態の違いを探るためである。

そのために、西田 (2020) の実験を、英語母語話者においても実施した。なお、NICER 3.3 のパッケージには、学習者データと、比較のための母語話者データ、および以下の関連ファイルが含まれているのでそれを使用した (杉浦他 2008)。

サブコーパス名

NICE-NNS : 学習者コーパス (349 ファイル)

NICE-NS : 母語話者コーパス (71 ファイル)

表 9~12 はその結果であり、() の数字は使用全体の割合 (%) を表す。

表 9. NNS 抽象名詞の誤用例 (トークン) (%)

定性(d)・特定性(d)・総称性(g)	冠詞と名詞の単数形・複数形					合計
	a(n)	-s	the	—	the -s	
-d +s -g	31.49	13.79	0.23	3.68	0	49.20
+d +s -g	1.84	10.11	21.61	0.46	2.07	35.63
-d -s +g	2.99	4.14	0	1.84	0	8.97
-d +s +g	4.60	0.92	0	0	0	5.52
-d -s -g	0.23	0	0	0	0	0.23
+d +s +g	0	0	0	0	0	0
+d -s +g	0	0	0	0	0	0
+d -s -g	0	0	0	0	0	0
合計	41.15	28.97	21.84	5.98	2.07	100

表 10. NNS 抽象名詞の正用例 (トークン) (%)

定性(d)・特定性(d)・総称性(g)	冠詞と名詞の単数形・複数形					合計
	—	-s	the	a(n)	the -s	
+d +s -g	21.02	6.99	14.65	0.38	2.76	45.79
-d +s -g	11.60	9.70	0.52	5.52	0.05	27.39
-d -s +g	12.89	7.42	0.14	2.23	0	22.68
-d -s -g	0.57	2.09	0.05	0.38	0	3.09
-d +s +g	0.10	0.86	0	0.05	0	1.00
+d -s -g	0.05	0	0	0	0	0.05
+d +s +g	0	0	0	0	0	0
+d -s +g	0	0	0	0	0	0
合計	46.27	27.06	15.36	8.56	2.81	100

表 11. NS 抽象名詞の正用例 (トークン) (%)

定性(d)・特定性(d)・総称性(g)	冠詞と名詞の単数形・複数形					合計
	—	-s	the	a(n)	the -s	
+d +s -g	12.04	6.75	22.03	3.25	4.18	48.25
-d +s -g	3.84	9.31	0.51	9.74	0.77	24.17
-d -s +g	10.33	3.59	0	0.51	0	14.43
-d -s -g	1.79	6.58	0.09	4.10	0.09	12.64
-d +s +g	0.26	0.09	0	0.17	0	0.51
+d +s +g	0	0	0	0	0	0
+d -s +g	0	0	0	0	0	0
+d -s -g	0	0	0	0	0	0
合計	28.27	26.30	22.63	17.76	5.04	100

冠詞と単数形・複数形の共起に関して検証する。日本人の正用での使用は、— (46.27%)、-s (27.06%)、the (15.36%) で (表 10 参照)、英語母語話者の使用も、— (28.27%)、-s (26.30%)、the (22.63%) の順であり、使用実態はほぼ同じである (表 11 参照)。一方、日本人の誤用 (誤用例は正しく直したもので集計) が多いのは、a(n) (41.15%) -s (28.97%)、the (21.84%) の順であり (表 9 参照)、不定冠詞 a(n) が過剰に使用されており、本来の無冠詞・単数形 (—) の使用が少ない。これは抽象名詞の概念と使用方法が不正確であることをうかがわせる結果である。

表 12. 抽象名詞の誤用例と正用例（トークン）（%）

NNS 抽象名詞の誤用例 (トークン) (%)		NNS 抽象名詞の正用例 (トークン) (%)		NS 抽象名詞の正用例 (トークン) (%)	
定性(d)・特定性(d)・ 総称性(g)	合計	定性(d)・特定性(d)・ 総称性(g)	合計	定性(d)・特定性(d)・ 総称性(g)	合計
-d +s -g	49.20	+d +s -g	45.79	+d +s -g	48.25
+d +s -g	35.63	-d +s -g	27.39	-d +s -g	24.17
-d -s +g	8.97	-d -s +g	22.68	-d -s +g	14.43
-d +s +g	5.52	-d -s -g	3.09	-d -s -g	12.64
-d -s -g	0.23	-d +s +g	1.00	-d +s +g	0.51
+d +s +g	0	+d -s -g	0.05	+d +s +g	0
+d -s +g	0	+d +s +g	0	+d -s +g	0
+d -s -g	0	+d -s +g	0	+d -s -g	0
合計	100	合計	100	合計	100

定性・特定性、総称性に関して検証する。表 12 は表 9～11 を定性、特定性、総称性の意味素性を基に、まとめたものである。日本人の正用例と英語母語話者の意味素性は +d -s -g, を除いてほぼ同じであり、使用方法に問題がないことがうかがえるが、日本人の誤用の使用例においては、1 番目の -d +s -g と 2 番目の +d +s -g が逆であり、3 番目に使用が多い -d -s +g (8.97%) の使用例が少ない。なお、英語母語話者においては、-d -s -g の使用が多い (12.64%) ことも特徴的である。これは聞き手が名詞 (句) を認識しておらず、話し手もそれを認識しておらず、かつ、その対象物が特定のものである場合である。

特定性と総称性の関係に関して検証する (特定性と総称性は反対の概念ではないことの証明)。表 13 は特定性 (±s) と総称性 (±g) が対立しない場合 (プラスとプラス、マイナスとマイナス) に焦点を当てた表である。なお、表 13 の数字は使用全体の割合 (%) を表す。

表 13. NNS 正用・誤用と NS の抽象名詞の使用例（トークン）（%）

— 定性、特定性、総称性 — (表 9～12 の一部使用)

意味素性	+d +s +g	-d +s +g	+d -s -g	-d -s -g
NNS 誤用	0	5.52	0	0.23
NNS 正用	0	1.00	0.05	3.09
NS	0	0.51	0	12.64

特定性と総称性は一概に反対の概念とは言えないことは、ほぼすべての事例が存在することで証明される。ただし、+d +s +g の場合のみ実例が存在しない (+d -s +g も実例が存在していない)。注目すべきは、英語母語話者の -d -s -g の使用がかなり多いことである。半面、概して数値がすべて小さいことは、特定性が総称性の反対の概念であることに影響を受けているとも考えられる。

5. 仮説検証

- (1) 日本人中・上級英語学習者と英語母語話者では、抽象名詞の冠詞の共起や単数形・複数形の使い方などが異なる。それが誤用としても表れてくる。

- (2) 日本人中・上級英語学習者の中には、総称の反対が特定であるという認識があり、誤用を生む一因ともなっている。そこで、抽象名詞と冠詞の共起を考える上で、抽象名詞の意味素性として総称性を選ぶことは妥当だと言える。
- (1) において、日本人中・上級英語学習者の正用と英語母語話者では、抽象名詞の冠詞の共起や単数形・複数形の使用実態はほぼ同じであった。そこで、抽象名詞の可算化や冠詞との共起に関する理解は、概ね正しいと考えられる。しかし、日本人の誤用を見る限り、弱点は存在する。
- (2) において、抽象名詞の冠詞の共起や単数形・複数形の使い方に誤用を生む重要な意味素性として総称性は重要であり、「総称性と特定性は反対の概念であるという認識が誤用を生む」一因となっていることは、日本人中・上級英語学習者の正用と英語母語話者にはあまり差がないものの、日本人中・上級英語学習者の誤用と英語母語話者の使用実態に差があり、さらに、特に-d -s -g においては、日本人と英語母語話者の間で差が大きいことを見れば、妥当な考えだと思われ、誤用の原因を探るヒントともなり得ると考えられる。

6. リサーチ・クエスチョンの検証

- (1) 抽象名詞に関して、日本人の誤用、日本人の正用、英語母語話者の使用では、どのような特徴があり、その理由は何なのか。
- (2) 抽象名詞と冠詞の共起を考える上で、抽象名詞の意味素性として総称性を選ぶことは妥当だと言えるのか。
- (1) において、日本人の使用実態は正用においては、英語母語話者の使用実態と抽象名詞の冠詞、単数形・複数形の共起において、ほぼ同じであり、その使用方法が正しいと推察される。しかし、日本人の誤用においては、抽象名詞が常に無冠詞・単数形であるという考えから来ると思われる、不定冠詞 a(n) や単数形での定冠詞 the の使用に誤用が多く見られた。さらに、日本人の誤用においては、-d -s +g (8.97%) の使用が、日本人の正用の使用や英語母語話者の使用に比べて少ない。英語母語話者は -d -s -g (12.64%) と使用が多い点も、日本人の正用、誤用に関わらず異なる特徴あり、言語認識に差があることがうかがえる。
- (2) において、特定性 (±s) と総称性 (±g) が対立しない場合 (プラスとプラス、マイナスとマイナス) に焦点を当てた 4 通りの場合 (+d +s +g, -d +s +g, +d -s -g, -d -s -g) において、日本人の正用・誤用、英語母語話者の使用例では、+d +s +g 以外のすべての使用例が存在し、その使用実態が異なるので、総称性を抽象名詞と冠詞の共起に関する重要な意味素性とすることは、妥当だと考えられる。なお、-d -s -g においては、日本人の正用と誤用の使用、英語母語話者の使用に大きな差が見られた。

7. 今後の課題

今回、定性、特定性、総称性の判定には、数名の英語母語話者と筆者が検討しながら決定したが、抽象名詞の単数形・複数形並びに冠詞の共起に関して、定性、特定性、総称性

を判断する上で、英語母語話者と日本人 L2 学習者でそれぞれの判断に差があるのか、また、差があるとしたら、その理由は何かを今後、検証したい。

¹ 1. 調査

(1) NICER : The Nagoya Interlanguage Corpus of English Reborn 1. 1. 1. (2018-04-05)

(杉浦他 2008) の NNS (L2 中上級者) に対して、抽象名詞の可算化に関する正用・誤用を調査する。被験者は 349 名 (JPN501~JPN849)。

(2) 調査する抽象名詞の誤用 (ネイティブチェックが入っているもの) は、①抽象名詞 (冠詞はつかず)、②不定冠詞 a(n)+抽象名詞、③定冠詞 the+抽象名詞、④定冠詞 the+抽象名詞 s、⑤抽象名詞 s (冠詞はつかず)、の 5 パターンに関するものである。なお、冠詞と抽象名詞の間の形容詞の有無は問わない。

(3) 抽象名詞の可算化に関する誤用の多かった抽象名詞を特定する。

2. 調査結果

表 1 は調査の結果、10 個以上の誤用があったもので、抽象名詞と冠詞の共起を単数形と複数形に分け、それぞれの単語についての正用と誤用をまとめたものである。誤用に関しては正用に修正されたものの数 (トークン) を表示した。なお、“sport”も誤用が多かったが“sports”として使用することが圧倒的に多いので、今回の統計処理では省いた。

参考文献

- 1) Chafe, W. L. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. in Li. C. N. (ed.). *Topic and Subject*. Academic Press. 1976.
- 2) Hawkins, Roger et al. “Accounting for English interpretation by L2 learners,” ms., University of Essex. 2005.
- 3) Ionin, T., Ko, H. & Wexler, K. “Article semantics, in L2 acquisition: The role of specificity.” *Language Acquisition* 12, 2004. pp. 3-69.
- 4) 石田秀雄 「冠詞の意味論—特定性と総称性—」 『中部地区英語教育学会研究紀要』 No. 24 1994 p. 61 中部地区英語教育学会
- 5) 石田秀雄 『わかりやすい英語冠詞講義 大修館書店 2002 p. 68
- 6) 金水敏 「連体修飾成分の機能」 『松村明教授古稀記念 国語研究論集』 明治書院 1986
- 7) 織田稔 『英語冠詞の世界』 研究社 2002 p. 6
- 8) 関口智子 「英語冠詞指導再考」 『専修大学外国語教育論集』 専修大学外国語教育研究室 2016 pp. 145-166
- 9) 杉浦正利、阪上辰也、成田真澄 「学習者コーパス『NICE』の構築」 杉浦正利 (代表研究者) 「英語学習者のコロケーション知識に関する基礎的研究」 (平成 17-19 年度科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書: 課題番号 17320084) 2008 pp. 1-14.
- 10) 西田一弘 「日本人 L2 中・上級学習者の英語抽象名詞の可算化に関する定性、特定性からの正用・語用分析」 『地域活性化研究第 19 号』 岡崎大学懇話会 2020 pp.79-88

- 11) 西田一弘 「英語抽象名詞と冠詞の共起における定性、特定性、総称性の関係性」 『愛知産業大学短期大学紀要第 34 号』 愛知産業大学短期大学 2021 pp.35-44